

# 早池峰山周辺地域におけるニホンジカ対策

岩手南部森林管理署遠野支署 森林官（宮守森林事務所）○服部 飛鳥  
森林官（土淵森林事務所） 大和田 洸希

## 1 はじめに

遠野支署管内には、北上山地の最高峰である早池峰山が存在する。早池峰山は、三陸北部森林管理署と遠野支署の管轄区域にまたがり、早池峰山周辺森林生態系保護地域が設定されている。本研究における「早池峰山周辺地域」とは、早池峰山に出現するニホンジカが、季節移動する可能性があるやや広範な地域と便宜的に定義する。

早池峰山周辺地域では、近年ニホンジカの生息密度が高まっており、東北森林管理局の調査によると、平成23年から29年にかけて、早池峰山を中心とした1万2千haの区域におけるニホンジカの平均生息密度は、1km<sup>2</sup>あたり1.5頭から8.2頭へと、約5.5倍に増加している。特定鳥獣保護・管理計画作成のためのガイドライン（環境省、2016）によれば、「自然植生にあまり目立った影響がでないシカの密度は1km<sup>2</sup>あたり平均3～5頭以下」とされているが、平成29年にはこの密度を超えている。

同調査では、早池峰山の高山植物の固有種であるナンブイヌナズナ、準固有種であるナンブトウウチソウ、ナンブトラノオでシカによる食害が確認されている。有識者は、「現段階では固有種への影響は大きくはないが、高山植物全体では、オオバギボウシ、ガンジュアザミ等のシカが好む種への影響は大きくなってきている」、と評価している。

シカの捕獲状況について、平成29年度の捕獲頭数は、岩手県全域の約1万4千頭のうち、約3千頭が遠野市内で捕獲されており、捕獲圧を高い状態で維持している。（表1）

これらのことから、遠野市内ではシカへの高い捕獲圧が維持されている一方で、早池峰山におけるシカの生息密度が高まっている。このため、早池峰山周辺地域でのシカへの捕獲圧を維持・向上させつつ、早池峰山の植生保護に特化した対策が必要と考える。

遠野支署では、いわば対処療法として、高山植物を保護する「植生保護柵」の設置を行い、抜本的な対策として、捕獲や捕獲支援を実施している。

本研究ではこれらの取組を検証し、今後の課題と対応方向を示した。

## 2 取組内容及び結果

### (1) 植生保護柵の設置

表1 遠野市内におけるシカ捕獲頭数の推移(頭)

	H26	H27	H28	H29	H30
市の有害捕獲 (4～10月)	1,015	705	951	1,264	1,425
県指定管理鳥獣 捕獲等事業 (11～2月)	1,279	878	879	1,425	930
一般狩猟 (11～3月)	117	203	210	212	137
合計	2,411	1,786	2,040	2,901	2,492

植生保護柵の設置は、岩手県と連携して行っており、遠野支署では、河原の坊登山道頭垢離周辺に、平成 30 年度からあわせて 2 か所、延長 200m を設置した。また、対策の円滑な実施を担保するために、岩手県及び三陸北部森林管理署との 3 者で、「早池峰山国定公園内の国有林野における防鹿柵の設置に関する協定」を締結した。

柵の設置には、資材の荷上げ、現地での設置、維持管理として降雪前に行うネット下げと融雪後のネット上げ、といった作業が必要である。

使用する資材はネットや支柱等、設置する道具には打ち込み器やハンマー等多数あり、特に、荷上げ作業には労力がかかる。(図 1)

表 2 は平成 30 年度と令和元年度で実際に設置に要した日数と人数である。令和元年度では、地形・地質の制約により 150 m 分の資材を荷上げたものの延長は 100m にとどまったため、荷上げと設置で実績が異なるが、換算した結果、延長 100 m の荷上げ及び設置には約 42 人工、春と秋の維持管理に各約 6 人工を要した。

今後の課題として、設置と管理に要する労力の増大に対応すること、早池峰山全体を柵で囲むことは不可能である以上、

柵の延長にも一定の限界があり、重要な群落の保護に限定しなければならないこと、設置や管理に際して高山植物の踏みつけを極力回避すること等がある。

なお、植生保護柵の設置効果については、森林生態系保護地域モニタリング調査や、専門家の調査により今後検証される予定である。

## (2)シカの捕獲

遠野支署では、ニホンジカ被害防除事業（誘引捕獲）を平成 28 年度から委託事業として実施しており、冬期間に誘引餌により誘引し、囲いワナ及びくくりワナを使用してシカを捕獲している。また、捕獲事業実施区域は、安全を確保するため、他の狩猟者等の立入を禁止している。



図 1 資材荷上げ時の様子

表 2 柵設置にかかった人数（日、人）

H30		
	日数	延べ人数
荷上げ(100m)	2	25
設置(100m)	1	17
維持管理(ネット下げ(100m))	1	5
R1		
	日数	延べ人数
荷上げ(150m)※	2	26
設置(100m)※	2	10
維持管理(ネット下げ(200m))	1	6
※地形・地質の制約により150m延長が100m延長にとどまった。		

表3が、委託事業における捕獲実績である。平成28～29年度は、大型囲いワナを1基で1頭の捕獲のみ、平成30年秋には、小型囲いワナ4基で1頭の捕獲、31年春に実施した事業では、小型囲いワナ6基で6頭を捕獲、くくりワナは16基を設置したが、クマを錯誤捕獲したため短期間で中止し3頭の捕獲にとどまった。

表3 支署委託事業による捕獲実績（頭）

設置年月	設置数	大型 囲いワナ	小型 囲いワナ	くくりワナ
H28年度 (1～3月)	大型囲いワナ(1基)	1	—	—
H29年度 (11～2月)	大型囲いワナ(1基)	0	—	—
H30年度 (11～1月)	小型囲いワナ(4基) くくりワナ(10基)	—	1	0
H30年度翌債 (R1,4～5月)	小型囲いワナ(6基) くくりワナ(16基)	—	6	3(1)
※()内の数字はツキノワグマの錯誤捕獲				

小型囲いワナの運用に習熟したために捕獲頭数は増加したが、今後の課題として、仕様書を定めて実施する等の委託事業の性質と制約上、シカの動態に合わせた臨機応変な事業運営が難しい面があるほか、クマの活動期におけるバネ式くくりワナの使用は錯誤捕獲のリスクが大きいことがあげられる。

錯誤捕獲については、バネ式くくりワナはツキノワグマの錯誤捕獲リスクが高いため、クマの生息密度が高い遠野市内では、市の有害鳥獣捕獲における森林内での使用を、原則として認めていない。したがって、森林内でのシカの有害鳥獣捕獲を促進するためには、錯誤捕獲対策がボトルネックとなっており、このブレイクスルーが大きな課題である。

錯誤捕獲を防止してシカを捕獲するために、クマがかかりにくい構造である非バネ式くくりワナの「いのしか御用」（以下「いのしか御用」という。）や、天井が空いているためクマが脱出できる「小型囲いワナ」といった錯誤捕獲のリスクが低いワナの検証と普及をしていくことを重要課題として位置づけている。

### (3)シカの捕獲支援

シカの捕獲支援として、林道除雪及び地元自治体等と締結した協定に基づくワナの貸与を行っている。

林道除雪では、冬期間に木材生産等の事業実施がなく、シカの出現頻度の高い区域の林道を除雪し、シカの捕獲を支援している。

平成24年度から毎年実施しており、令和元年度の実施路線数は8路線である。（表4）

表4 各年度の実施路線数（路線）

H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1
1	1	2	7	2	2	7	8

平成30年度の狩猟期間である11月から3月の遠野市内におけるシカの捕獲頭数を、メッシュ区画ごとに整理した。林道除雪実施区域や木材生産事業等による入林規制区域を併せて示した。（図2）

この図から1メッシュ区画あたりの捕獲頭数を比較したところ、平均捕獲頭数は区画全体31頭に対し、林道除雪実施区域は102頭であった。（表5）

林道除雪はもともと捕獲頭数が多い場所で行っていることをふまえても、他の区画に対して有意な差が見られた。なお、入林規制区域の平均捕獲頭数は 38 頭だが、これはメッシュが大きいいため規制区域外も含まれるためである。

表5 1メッシュ区画あたり捕獲頭数

全メッシュ	全頭数/全区画 =31 (0頭区画は除く)
入林規制 	(16+17+0+104+48+41)/6 =38
林道除雪 	(92+131+68+116)/4 =102

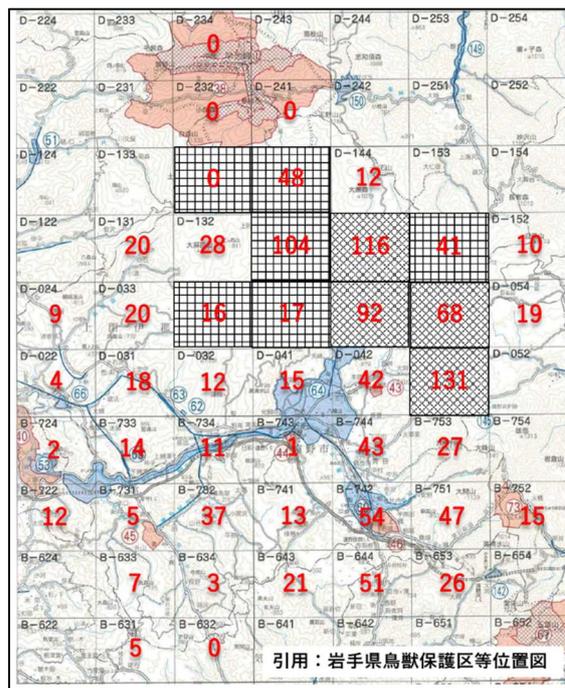


図2 遠野市内におけるメッシュ区画毎の捕獲頭数(頭)

以上のことから、林道除雪は遠野市内における高い捕獲圧の維持に寄与しているものと考えられる。

次にワナの貸与についてだが、遠野支署では森林内でのシカの捕獲を促進するために、地元自治体や猟友会等とニホンジカ等被害対策協定を締結して「小型囲いワナ」やいのしか御用を貸与している。

遠野市とは平成30年度に協定を締結し、令和元年12月現在、小型囲いワナ4基、いのしか御用50基を貸与している。花巻市とは令和元年度に協定を締結し、いのしか御用30基を貸与している。

平成30年度貸与の小型囲いワナによる捕獲実績はない。これは、ワナの運用に習熟が必要なことや、重いため運搬・設置が負担になること等が理由と考えられる。

また、いのしか御用の本格的な運用は、令和2年度の有害鳥獣捕獲期(4月から10月)になる見込みだ。

### 3 課題と今後の対応方向

(1) 植生保護柵の設置の課題として、できる限り早い時期のネット上げや、作業時における高山植物の踏みつけの防止、設置や管理に要する労力の確保があげられる。

まず、高山植物の踏みつけを防止するには、少数精鋭での実行が前提と考える。

労力の確保については、現状規模での柵の維持管理であれば支署単独での対応が可能である。しかしながら、新規・延長設置については荷上げに要する人工の確保が支署単独では重い負担となるため、局の支援や隣接署との相互応援が重要と考える。また、関係自治体への協力要請も考えている。

(2) 次に遠野支署によるシカの捕獲事業では、まず、森林内での捕獲を促進するための

ツキノワグマの錯誤捕獲防止対策が重要であり、「いのしか御用」による捕獲効率の検証や「小型囲いワナ」の運用改善を、令和2年春の捕獲事業で行う。

また、現在のところ支署による捕獲実績は少ないため、狩猟等による高い捕獲圧を維持している遠野市内において、支署の捕獲事業のために狩猟者等の入林を制限することは逆効果になりかねず、すべきではないと考える。

このため、国・県・市のシカ対策全体を踏まえた取組のすみ分けが重要であり、国による捕獲事業は、

- ① 木材生産事業等を実施するため鳥獣捕獲のための入林を制限する区域
- ② 既存の枠組での捕獲が期待できない区域(狩猟者がいない、アクセスが悪い等)
- ③ 指定管理鳥獣捕獲事業や市の有害鳥獣捕獲事業の端境期(3～5月頃)
- ④ 新たな捕獲方法を検討する場合(いのしか御用等)

等における実施が効果的であると考え。

(3) 林道除雪は、実施メッシュでの捕獲頭数の多さから効果が高いと認められるため、猟友会等と調整し今後も継続して実施していくことが望ましいと考える。

(4) ワナの貸与については、「いのしか御用」の捕獲効率の検証が課題である。当支署の情報提供により先行的に導入した遠野市の担当者によれば、「冬期は表土凍結により設置が難しい」、「数回捕獲するとプラスチック部分が破損する」といった現場の声があるとのことだった。

令和2年度の遠野市及び花巻市の有害鳥獣捕獲事業において、貸与した「いのしか御用」80基が本格的に運用される予定なので、その運用結果を検証していく。

#### 4 参考文献

早池峰山周辺地域のニホンジカ生息状況・森林影響等調査(東北森林管理局. 2019)  
特定鳥獣保護・管理計画作成のためのガイドライン(環境省. 2016)